

# 最初の生命

小野ユージン

## 最初の生命

---

地球上における最初の生命の誕生は、太古の昔、海の中で、長い時間をかけて「命のない有機物」が「生命体」になったという説が最も有力らしい。

私が最初の生命に関して疑問に思っているのは、最初に誕生した生命は、たった一つだったのか、それとも無数の生命体が同時発生的に生まれたのか、ということである。

生命の誕生、「ただのもの」が「命あるもの」になるということ、無から有への転換が、人間には為しえない神秘的な現象であるならば、そのような奇跡は、たった一つの生命体にだけ起こったことだと考えられる。

だが、厳しい自然環境の中で、生まれたばかりの生命体が生き残ることが非常に困難であることを考えれば、無数の生命体が同時発生して、その中で生き残ったものが子孫を残したのだとも考えられる。

もしかしたら、無から有への転換、生命の誕生はたった一つの生命体にしか起こらなかったことだが、その最初に生まれた生命体は、生まれてすぐに分裂し、増殖し続け無数の生命体が存在するようになったのかもしれない。

なお、この世に最初に誕生した生命がたった一つであり、かつ進化論的な考えが正しいのなら、現在地球上に存在している生き物は、我々人類も、人類が下等生物とみなしている単細胞生物も、元をたどっていけば、たった一つの最初に生まれた生命にたどりつくことになる。

この世に存在している生き物は、皆血縁関係にあるといえるだろう（といっても、太古の生命体に血液はなかつただろうけども）。

一方、科学的にはありえない奇説だとは思いますが、最初に生まれた生命は一種類ではなく、複数の別種の生命体が生まれ、それぞれが高等生物、中等生物、下等生物へと進化を遂げていったのかもしれない。

また、この世にいったん誕生しながらも、現在まで子孫を残すことなく消えてしまった生命というものも存在していたのだろうか。

生きとし生けるものの遠い祖先といえる最初の生命とは別の存在、日本神話におけるヒルコのような存在。

もしかしたら、そのような生命がいくつも生まれは消えていき、やがて子孫を現在まで残すことができた、我々人類の祖先といえる最初の生命が誕生したのかもしれない。

## 結婚で大切なのはお金か愛情か

---

結婚する際大切なのはお金か愛情か、といった類の議論は昔からよくあった。日本人はこういった二者択一的な議論が好きなのかもしれない（外国でも同じような事情があるのかもしれない）。

ただ、この問いかけの中には2つの解釈が含まれている。

1つは、結婚にはお金と愛情どちらも大切だが、相対的にどちらをより重視するかといった解釈。

もう1つは、結婚相手の条件にお金か愛情どちらか1つだけを求めるとしたら、どちらを選ぶのかといった解釈。

人によって解釈の仕方がことなるため、議論がかみあわないことが往々にしてある。

たとえば、前者の解釈で「お金が大切だ。」と言った人に対して、後者の解釈をした人が「じゃあ、お金持ちならばまったく愛情を感じない相手とも結婚できるのか。」といった極論を投げつける。

また、「相対的に愛情が大切だ。」と考えている人に対して、「愛情さえあれば収入の全くない相手とも結婚できるのか。」と問い詰める。

討論というものは、極論どうしがぶつかりあった方が面白い場合があるから、お金も愛情も両方大切だという常識的な考えをもつ人どうしが議論しても、さして面白みのあるものにはならないだろう。

なお、「お金が大切だ。」あるいは「お金も大切だ。」といった場合には、どの程度のお金が必要なのかといったことも論点になるだろう。

「生活していくのに必要なお金があれば充分だ。」と考える人もいれば、「生活費の他に余暇に使うためのお金がある程度必要だ。」と考える人もいるだろう。一方、「贅沢な暮らしを送れるだけのお金が必要だ。」と考える人もいるだろう。

「生活していくためのお金が必要だ。」といった意味で「結婚にはお金が（も）大切だ。」と考えている人を、愛情よりお金を優先している人とみなすのは無理があるだろう。

## お金儲けは悪いことか

---

お金儲けは悪いことか、という問いに対して私は明確な答えをもちあわせていない。悪いことだ、といいきることもできないし、かといって悪くない、と断言することもできない。

お金儲けを悪いことと考える宗教や哲学は昔から多くあったろう（というよりもそう考える宗教や哲学が大半であろう）。

ただそれらの宗教や哲学は、お金儲け自体が道徳的、倫理的に悪いことであることを、説得力ある形で説明できているのだろうか。

宗教や哲学は、多くの場合人間の欲望そのものを悪ないしは否定すべきものと考えているので、人間の欲望の代名詞ともいえる「お金を儲けたい」という感情を悪いこととみなすようになったのかもしれない（その場合、なぜ人間の欲望を悪いこととみなすようになったのかという疑問が生じてくるが）。

私は、お金儲けが悪いことかについては明確な答えをもっていないと書いたが、「金儲け至上主義」が悪いことであることは明確に断言できる。

「金儲け至上主義」は、お金儲けに一番の価値をおいているので、これを実現するためには何をやってもいい、良い法律をおかしてもいい、道徳的、倫理的に悪いことをしてもいいという考えをもたらす。

守るべき良い法律は守る、（お金儲けを悪いこととした以外の）道徳的、倫理的に悪いことはしない。

これらのことを守れるのならお金儲け自体を肯定することもできるだろう。

お金儲けが悪いことだとみなされるようになったのは、お金儲け自体が道徳的、倫理的に悪いことだからではなく、お金儲けを肯定した人は、往々にしてお金儲けのためには何をやってもいいと考え、人に迷惑をかけたなり他者や社会に悪影響をもたらしたからではないだろうか。

## 血液型性格診断が信じられている理由

---

血液型性格診断（占い）は、科学的には何の根拠もないといわれている。

だが、多くの日本人が科学的に何の根拠もないものを信じているのには、それなりの理由があるのだろう。

まず、人間の性格タイプを4つに分類し、これを4種類の血液型と結びつけば、単純に考えて4人に1人はこれを当たっていると考えておかしくはない。

日本人の約25%がこれを信じているとすれば、二千万人以上の人が血液型性格診断を信じていることになる。かなりの数の人が信じているといえるだろう。

だが、血液型性格診断を信じている人は25%程度ではなく、もっと多くの人がこの診断を信じているようにもみえる。

おそらくそれは、最初に血液型と人間の性格タイプを結びつけた時の、そのやり方に原因があるのだろう。

「性格判断テスト」を実施して人間の性格タイプを「真面目型」「おおらか型」「自己中心型」「二重人格型」の4つにわけた。

おそらく日本人の気質、国民性からすれば「真面目型」が一番人数が多いであろう。

そして次に「おおらか型」が多く、「自己中心型」「二重人格型」は少数派となるだろう。

日本人に一番多い血液型はA型だから、これと「真面目型」の性格タイプを結びつける。どの性格タイプもA型が一番多いだろうが、それだと血液型による性格診断が成り立たないので、二番目に多い血液型のO型と二番目に多い性格タイプ「おおらか型」を結びつける。

同様に三番目、四番目に多い血液型と性格タイプを結びつける。

これが血液型性格診断の実態であろう。

「統計調査」によって一番多い血液型と一番多い性格タイプを結びつけているのだから、これがあたっていると考える人が多くいても不思議ではないだろう。

一方、海外では血液型性格診断を信じる人は少ないというが、日本とは血液型別の人口比率も性格タイプ別の人口比率もことなるだろうから、日本の統計調査の結果を海外にあてはめても妥当しないのが当然だろう。

だから、各国ごとに一番多い血液型と一番多い性格タイプを結びつけていけば、血液型性格診断を信じる人はもっと増えるだろう（ただし、このことは性格形成に血液型が影響していないことを証明する結果になるが）。

また、血液型別の人口比率、性格タイプ別の人口比率が日本と同じ国や地域であるならば、血液型性格診断を信じる人は多いだろう。

なお、血液型性格診断が一度社会に流通すると多くの人がかかかってしまい、「自分の血液型は何々型だから何々タイプの性格だ。」と思いついてしまうといった面もあるだろう。

最後に、ビートたけしがだいぶ前に述べていたことだが、人間は皆4つの性格タイプの要素を多かれ少なかれもっているのだから、「何々型の血液型の人々の性格は何々だ。」と示されれば、誰でもあてはまるといった面もあるだろう。

## 戦国時代と幕末維新—動乱の時代には英雄が輩出するのか

---

日本史上の動乱の時代といえば、戦国時代と幕末維新の時代がその代表だろう。

日本の歴史の中では、この2つの時代が好きだという声をよく聞く。

また、この2つの時代には多くの有名人、あるいは英雄、英傑といわれている人物が輩出している。

というわけで、「動乱の時代には英雄が輩出するのか」というテーマについて考察してみたい。

まず、「動乱の時代には英雄が輩出する」という前提に立って、それはなぜなのかを考えてみたい。

1つめの解釈としては、動乱の時代には神あるいは天のような人智をこえた存在によって英雄的な人物が生み出されるのだ、という考え方がある。

神や天が、混乱の世に苦しむ多くの民を救うため、英雄としての資質、能力をもった人物を世に送り出したとする思想。

逆に平和な時代には多くの民は平穏な暮らしを送っているので、英雄的な人物を生み出す必要がないとも考えられる。

もちろん、神のような超越者の存在を否定する近代的な立場からは、このような考えは非科学的、非合理的だとして批判されるだろう。

だが、近代以前の思想や物語には神や天が混乱の世に英雄あるいは救世主を送り出すという考えがみられるだろう。

また、現代においても小説や映画、漫画の中にこのような思想の痕跡がみいだされるだろう。

2つめの解釈として、神や天が英雄を生み出したのではなく、人が動乱の時代に生きる中で英雄的な能力を発揮したのだ、とする考え方がある。

危機的な状況に対処するために、潜在能力を発揮して英雄的な行為をしたのだという考え。時代が人を英雄へとつくりかえたのだとする現実的、合理的な思想。

英雄といわれた人たちも、平和な時代に生まれていれば無名の平凡な人物として一生を終えていただろう。

逆に、平和な時代に生き無名のまま生涯を終えた多くの人たちも、生まれた時代が動乱の時代であったならば英雄、英傑として後世に名が残っていたかもしれない。

続いては、「動乱の時代に英雄が輩出されているわけではない」という前提に立って考えてみたい。

動乱の時代といわれる戦国時代、幕末維新の時代には多くの有名人が存在している。

だが、彼らは名前が後世に残っているだけで、英雄でも何でもないという解釈も成り立つ。

平和な時代というのは歴史に残る事件、出来事があまりおきないので、その時代に生きた人たちは多くが無名のまま生涯を終えてしまう。

一方、動乱の時代には歴史に残る多くの事件、出来事がおこるので、それらに関わった人たちの名前が後世に残される。

人は、有名人イコール英雄、英傑と思い込んで、歴史に名の残った人物を英雄扱いしているが、彼らはただ有名だけで、資質的、能力的には平凡な人間にすぎなかったかもしれない。

最後に、以上の諸点を踏まえた上でまとめしてみたい。

まず、「動乱の時代には多くの有名人が存在している」というのは間違いないだろう。

そして、それら有名人の中にはただ名前が後世に残っただけの人物もいれば、何らかの評価できる業績を残したことによって英雄、英傑と称えられている人物もいるだろう。

ただ、こうした評価には客観的な基準はないから、ある人物を英雄とみなすかただの有名人とみなすかは、人によって判断がことなるだろう。

多くの人によって肯定的に評価されている人物もいれば、毀誉褒貶のはげしい人物もいる。また、時代の移り変わりとともに評価が反転する人物もいるだろう。

また、英雄とみなされるだけの業績を残した人物の中には、危機的な状況に生きたからこそ潜在能力を発揮しえたのであって、平和な時代に生きていたら無名のまま平凡に生涯を終えた人もいだろう。

一方、平和な時代に生まれても、何らかの業績をあげて後世に名を残した人物もいだろう。いずれにせよ、「動乱の時代とは、人が英雄的な資質、能力を発揮しやすい時代のことだ」とはいえるだろう。

なお、「神や天が英雄的な人物をこの世に生み出す」という考えに対してだが、これは神が実在するかどうかがわからない以上、肯定も否定もできないといった所である。

近代科学至上主義的な立場にたてば、オカルト的な解釈として批判される考えなのだろうが、近代科学的な認識や解釈のみが真理であるかはわからない。

「人智をこえた力によって歴史が動かされている」といった非科学的な考えを実感としてもっている人は多いのではないだろうか。

哲学上の「決定論」と「自由意志論」の問題が人間には答えのだせない問題であるように、この問題にも明確な答えはだせないだろう。

## 最初の生命

<http://p.booklog.jp/book/7863>

著者：小野ユージン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/onoeugene/profile>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/7863>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ